

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	2022年度JISRプログラム：「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム」日本語予備教育
Author(s)	田北, 冬子
Citation	広島大学留学生教育, 27 : 67 - 73
Issue Date	2023-09-30
DOI	
Self DOI	10.15027/54874
URL	https://doi.org/10.15027/54874
Right	
Relation	



2022 年度 JISR プログラム

「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム」日本語予備教育

田北冬子

1. プログラム概要

2022 年度シリア国「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム(JISR)」日本語予備教育
Japanese Initiative for the future of Syrian Refugees (JISR)
(このプログラムは独立行政法人国際協力機構-JICAからの委託を受け、広島大学にて実施する日本語予備教育プログラムである)

研修期間 令和4年12月19日～令和5年7月27日

研修員人数、国名 6名(シリア)

2. 案件目標(アウトカム)と単元目標(アウトプット)の達成度

案件目標:

シリア難民に対する人材育成事業「シリア平和への架け橋・人材育成プログラム」研修員に対し、大学院専門教育に入る前の段階で、日本語の予備教育を行い、研修員の日本語能力を向上させる。到達目標としては日本語能力試験 JLPT の N3 レベル相当とする。

手段・指標:

年末年始の冬期休暇中を除いて平日にほぼ休みなしで、10時30分から16時05分まで講義・演習形式の授業を行った。主教材はテキストとして『NEJ テーマで学ぶ基礎日本語』(くろしお出版)、『NIJ テーマで学ぶ中級日本語』(くろしお出版)を活用した。それぞれのユニット終了時に「到達度テスト」としての理解を確認するために確認テストを4回実施した。さらに『TRY!日本語能力試験 N3 文法から伸ばす日本語』(アスク出版)、『TRY!日本語能力試験 N4 文法から伸ばす日本語』(アスク出版)、『中級へ行こう日本語の文型と表現 55 第2版』(スリーエーネットワーク)のテキストを追加し、確認テストを2回実施した。

授業前や講義後の空いた時間には、広島大学に在籍する日本人学生のチューターを各研修員に割り当て、日本人学生によるチュータリング・サポートを週2-3回行い、なるべく研修員が日本語を使う状況となるよう促した。

評価基準の1つとして、研修員全員に一般社団法人日本語教育支援協会が実施している日本語テストシステム J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) を4回受験させ、日本語能力の向上を客観的に確認することができるようにした。

なお、研修最終日には、研修員は成果発表する場として、日本語でのプレゼンテーションを行い、成果発表を行った。

達成度：

研修員6名全員が日本語能力の向上が認められ、研修員6名のJ-CATのスコアについて個人差はあるものの、ほぼ全員が順調にスコアを伸ばした。6名中3名が150点以上のスコアを取得し、目標を達成したと考えられる。

また、最終日に行われた成果発表会でも全員が日本語でプレゼンテーションを作成し、日本語で発表、質疑応答も行き、十分な成果が得られたと判断できる。

貢献要因：

貢献要因として三点挙げられる。一点目は、研修員一人ひとりのモチベーションが非常に高く、当初から自分で課題をこなし、積極的に日本語学習に取り組むことで、成果が上がってきた。

二点目として、研修員一人ひとりに日本人学生チューターを割り振り、講義時間でない空いた時間に日本人学生からサポートを受けることができた点である。授業ではなかなか日本語会話を練習する機会がない中、チューターとのセッション時間では、積極的に研修員が日本語を話す機会を作ることができ、授業内容のものや宿題の補助も得ることができた。これは本学の日本人学生にとっても、外国人研修員と交流ができ、異文化理解を深めることにつながったと思われる。

また、三点目の貢献要因として、教員間およびスタッフで連携して本研修に協力して進めることができた点がある。日替わりで教員が交代して授業を進めていく中で、教員間で講師会を随時(月1回)行うなど、情報を共有し、担当している授業以外にも研修員の個々の課題などに対応できた。

単元目標（アウトプット）

単元目標①：

日本語の読解・作文能力の向上

指標：

各研修員に語彙、単語、エッセイなどの確認テストを課し、その内容及び演習の内容、講義後の質問内容等から評価する。なお、評価はA～Dの4段階評定とし（A：80～100%、B：60～79%、C：40～59%、D：0～39%）、評定B以上を目標達成とする。

達成度：

研修員6名全員が目標に達成した。入国前の事前課題として日本語の書き取りを課して

いたこともあり、研修員の努力も相まって当初からひらがなの書き取りはできていた。

貢献要因・阻害要因：

貢献要因として、研修員は当初からモチベーションが高く、入国前から読解・書き取りの課題を課したが、全員が怠けることなくこなしており、1回目の確認テストから6人中5人が70点以上の好成績であった。

阻害要因として、日本語の漢字はやはり難しく、非漢字圏の留学生にとっては、その習得はハードルが高い。

単元目標②：

日本語の聴解・会話能力の向上

指標：

講義・演習中の内容及び講義後の質問内容、チューターからのレポート等から評価する。なお、評価はA～Dの4段階評定とし（A：80～100%、B：60～79%、C：40～59%、D：0～39%）、評定B以上を目標達成とする。

達成度：

研修員6名が目標を達成した。

貢献要因：

貢献要因として、次の二点が挙げられる。一点目は、講義・演習の中で各研修員にシャドウイング（聞こえてくるスピーチに対してほぼ同時に、あるいは一定の間をおいてスピーチと同じ発話を口頭再生する行為）の演習を行い、発声練習を多く行った。二点目は、研修員一人一人に日本人学生のチューターを割り当てる（週2～3回、1回60分）ことで、講義以外の時間でも日本語会話の機会を多く得られた。チューターとの予定が合わず、実施回数が少なくなる等の課題も見られたが、割り当てるチューターを増やすことにより、改善していった。

単元目標③：

日本語での発表能力の向上

指標：

各研修員が習得した日本語能力を用いて、研修の成果発表を日本語で行った。発表内容は本研修のことや、日本での生活や母国の紹介などをテーマとして研修員自身が選択した。その発表内容や教員からの質疑応答の内容等から評価する。評価は理解度を示すA～Dの4段階評定とし（A：80～100%、B：60～79%、C：40～59%、D：0～39%）、評定B以上を目標達成とする。

達成度：

研修員 6 名全員が目標達成した。

貢献要因・阻害要因：

貢献要因の一つとして、発表が行われる約 1 月前から成果発表会のためのスケジュールを組み込み、それに向けて教員とチューターの補助で取り組む機会を作った。研修員も発表に向けて、講義時間外でも作業に真剣に取り組んだ。

達成度測定結果（上記達成度の判断根拠およびデータ）

案件目標の達成度

J-CAT（令和 5 年 2・4 月と 6/7 月を比べた結果）

* 各研修員スコアの最低点と最高点を比較

2023 年	Student A	Student B	Student C	Student D	Student E	Student F
2/4 月	99	119	105	146	99	96
6/7 月	134	166	157	222	143	148

《参考資料》 JLPT と J-CAT の比較（J-CAT のホームページより）

SCORE	LEVEL	JLPT (旧)	JLPT (新)	J-CAT (ホームページ)
-100	初級	Level 4 4 級	N5	
101-150	中級前半	Level 3 3 級	N4	N5
151-200	中級		N3	N4
201-250	中級後半	Level 2 2 級	N2	N3
251-300	上級前半	Level 1 1 級	N1	N2
301-350	上級			N1
350-	母語話者相当			

※表の見方と結果の分析

左端の数値は、J-CAT の Score を示し、それが J-CAT が示すレベル、過去の JLPT (旧) と新テストの JLPT との相関を表してのものである。しかし、最近の J-CAT のホームページでは、右端の新たな J-CAT の Score と JLPT の点数の相関基準を示している。以前と新しい基準を総合すると、黄色の帯で示した範囲、つまり、J-CAT151～250 の幅広い範囲が JLPT の N3 の範囲と考えられる。厳しい基準では 201 点以上が N3 であるが、緩い基準では 151 点以上である。これらを踏まえると、4 月～7 月末の最終テスト結果では、緩い基準では 6 名

中、3名がN3の基準に達しており、他2名がそれに近い基準に到達していると考えられる。

3. 研修案件に関する所見

(研修の運営や質の向上の観点からの振り返りについて記述。特に工夫した内容や注力した取り組み及びそれらの結果、過年度からの変更点、新規導入した講義や視察など。)

(1) 研修デザイン～研修期間・プログラム構成等

今回3回目となる、広島大学森戸国際高等教育学院として受託した本研修について、目標設定としては日本語能力検定N3レベルを目指すことであった。

日本語学習を全く学習したことのない非漢字圏の学生(1名を除き)に対して、初歩の日本語学習を短期間で行うということで、目標達成は当初から困難なものであった。

昨年度に引き続き、本研修の取りまとめを森戸国際高等教育学院の田北(准教授)が担当し、補助教員として特任教授1名と非常勤講師2名の体制で研修の運営をした。

11月、研修開始前ではあったが文字学習に慣れてもらうこと等を目的に、課題を出した。ある程度研修員個々の能力・適性を踏まえて、それらに合わせて教育を施した。

年末年始を除いてほぼ平日は休みなしで最後まで集中研修を行うようにプログラムを組み立てた。成果発表、修了式の後も自習課題を出し、8月中旬まで日本語学習を続けた。

(2) 研修内容(コンテンツ)～研修プログラム内容・研修教材等

研修内容については、以下の点に工夫を図った。

- ① 前年度からの変更点として、より実践的な視点から日本語学習を行うため、主教材として『NEJ テーマで学ぶ基礎日本語』(くろしお出版)、『NIJ テーマで学ぶ中級日本語』(くろしお出版)を活用し、講義と課題に利用して集中的に学習を行った。当該教材の終了後は、『TRY!日本語能力試験 N3 文法から伸ばす日本語』(アスク出版)、『TRY!日本語能力試験 N4 文法から伸ばす日本語』(アスク出版)、『中級へ行こう日本語の文型と表現 55 第2版』(スリーエーネットワーク)を新たに導入し日本語能力試験への準備も行った。
- ② 月曜日から金曜日まで週5回3コマずつ(合計15コマ)、年末年始を除いて休みなしで講義・演習を行った。授業時間は合計で414コマ(621時間)に及んだ。
- ③ 講義・演習の中では研修員に合わせて文字の語彙・聴解や、文法・読解を行った。今年度は新たに異文化理解の授業を導入し、様々な視点から日本語能力のさらなる向上を目指した。

(3) 研修の効果を高める工夫

研修効果を高めるために以下の点に工夫を図った。

- ① より話題中心の教材を導入し、実践的な日本語を多く取り入れた。
- ② 研修員一人一人に日本人学生のチューターを割り当てることで、講義以外の時間でも日本語と会話をする機会が多く得られた。チューターとは年齢も近く、積極的に研修員が日本語を話しやすいと思われる。授業や宿題の補助もチューターの助けを得て、進めることができた。
- ③ 研修中に3回日本文化体験の研修を行った。1回目は令和5年5月に広島大学で茶道体験を行った。研修員からは活発な質問や感想が出された。2回目は、6月に広島大学で和食料理教室を行い、研修員が積極的に調理に取り組む様子が見られた。同日に3回目の書道教室を行い、研修員は思い思いの字を半紙に書き、より日本文化への理解を深めた。

【茶道】 広島大学での茶道の様子



【料理教室】



【書道体験】



【成果発表会・修了式】



4. 次年度へ向けた改善点及び提案

<成果面>

最終日に行われた評価会では、研修員は一人ひとりが研修の学習成果として日本語での成果発表を行った。発表内容は研修員ごとにテーマが重ならないように設定し、自己紹介や自国紹介、この日本語研修の経験や広島での生活、将来の目標などを日本語で発表し、教員やJICA側の参加者からの質疑応答に的確に答えることができた。研修の成果は十分に感じられた。

<生活面>

生活面としては、妊娠中の研修員や持病で通院が必要な研修員もいたが、JICEのコーディネーターに生活支援をしていただき、病院への付き添いなど、研修員が困ることがないよう、ケアをしていただいた。

<学習面>

研修開始時期が12月中旬であったため、授業の開始1週間ほどで休暇に入ってしまった。ある程度学習をしたうえで休暇中に課題や復習に取り組めるよう、できるだけ12月初旬からの開始がよいと考える。研修員のうち2名は、4月から進学先の広島大学に研究生として在籍を開始しゼミの参加と正規性試験に向けた準備も始めたため、それらと並行して日々の長時間の日本語授業と宿題、週3回のチュータリングを行うことは大変だった様子が見受けられた。研修員研修中はできるだけ日本語学習に専念できる環境が望まれる。

次年度に向けては、今年度の研修内容を基本として、講義・演習、チューター制度を活用しつつ、書字教育、日本語能力試験準備にも早くから取り組み、日本語能力のさらなる向上を目指して研修を進めていきたいと考える。

以上

(JISRプログラム日本語予備教育は、広島大学国際室国際部グローバル化推進グループとの共同活動である。)